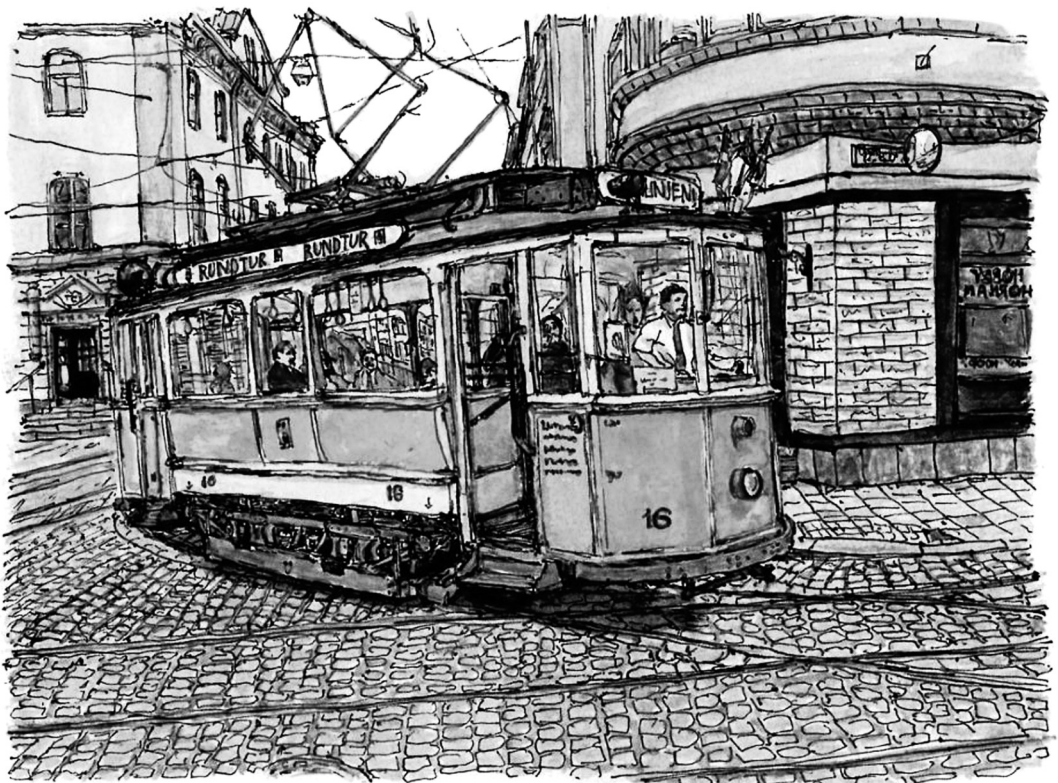


白夜

第 34 号



スウェーデン・ホルムスティング市トラム
Koo M 2010.9.25

北海道スウェーデン協会

2013. 4

創立35年を迎える 北海道スウェーデン協会

杉本 拓

本年2月、北海道出身の渡邊芳樹駐スウェーデン日本大使を昨年が続いてお招きし、最近のスウェーデン情勢、そして「未来のために今日日本とスウェーデンが出来ること」と題してご講演をいただきました。当初ヴァリエ駐日スウェーデン大使閣下との対談を予定していましたが、大使のマーシャル諸島への公務出張のためやむなく変更になったものです。しかし、ヴァリエ大使は、ほぼ一昼夜航空機を乗り継いで大変厳しい吹雪の札幌において下さり、短時間でしたが渡邊大使と日本・北海道とスウェーデンの将来について語られたことに出席者一同大変感銘を受けました。その中で、大使は2018年が日瑞外交関係樹立150年、その時に何か両国の関係を深化させる企画をと、希望と夢を私どもに与えてくださいました。あまり時間はありませんが、知恵を出し合いたいと考えます。

そして今年はまだ、北海道スウェーデン協会にとって一つの曲がり角を迎えます。それは、これまで中心となってお働き下さった東海大学川崎一彦教授が、定年で札幌を離れてスウェーデンに転出されることです。スウェーデンと北海道とのパイプ役に一段のお働きをいただけることですが、一抹の不安を覚えます。私ごとになりますが、スウェーデンをはじめとする

北欧との出会いは、25年前の川崎先生によるものです。ノールウェイ・トロムソ市で行われる北方都市会議の下打ち合わせの途上、ストックホルムで先生がセミナー「サッポロディinストックホルム」を企画してくださいました。著名な方々にお集まりいただいて、川崎先生が「滋賀県出身の私が、何故ストックホルムから札幌に移り住んだか」をお話しになり、そして私が札幌市を紹介させていただいた感激は今でも鮮明な記憶となっています。その後たびたび北欧諸国の地域を訪れ社会福祉、産業振興、自然環境及び芸術文化等多く学ぶことができたことは、私の人生にとって大きな糧となりました。白夜の紙面を借りて感謝申し上げます。

さて、北海道スウェーデン協会は1978年の創立ですから、今年で35年の年月を経過することになります。これまで多くの人々によって有意義な歩みを続けてきたことに敬意を表します。地理的にも、自然・気候も共通することの多い北欧諸国、スウェーデンと姉妹都市提携をしている自治体もあり、また、札幌にはスウェーデン名誉領事館、当別町には財団法人スウェーデン交流センターが存在しています。更に北方圏センターから改称した公益法人北海道国際交流・協力総合センターが開催する北方圏講座など、本年もこれら関係団体と連携を密にしながら北海道民とスウェーデンとの交流を図っていくとともに、5年後の日瑞交流150年に思いを馳せて協議してまいりたいと考えます。

〈本協会会長〉

四半世紀の北海道

川崎 一彦

北海道における私の四半世紀（1988-2013）を思い起こしてみますと、以下のような6つのキーワードが浮かび上がってきました。

- ・北海道
- ・北欧
- ・教育（改革）
- ・幸せ
- ・利他性（altruism）
- ・多様性（diversity）

以下それぞれのキーワードについての想いを簡単にご説明させていただきます。

〈北海道〉

私は北海道とはもともと縁もゆかりもありませんでした。

しかし、ジェットロ（日本貿易振興会）ストックホルム事務所勤務時代には、〈北方圏交流〉に注力していた北海道からの訪問者が多く、たとえば本協会の墨谷和則さんとは、NOEX（北方圏経済交流協会）の北部スウェーデンミッション（1986年）でお手伝いをさせて頂いて以来のおつきあいです。

スウェーデンの生活が長かったので、もう日本の生活には戻れない、と私は思っていました。そして東海大学の札幌キャンパスに日本初の国際文化学部をつくるので来ないか、というお誘いを頂きました。札幌を下見に来た時の私の印象は、「札幌は日本離れしている。日本には住めないが、札幌なら住めそう」というものでした。この印象は今でも変わりません。

そして1988年4月に赴任してから北海道／札幌に25年間、四半世紀お世話になりました。

私は65歳ですが、一カ所に住んでいた場所と

しては札幌が最長です。期間だけではなく、内容もこれまでの人生で最も充実したものでした。これもお会い出来た皆様のおかげと、心より感謝しております。

〈北欧〉

子ども2人がストックホルムにおり、私は毎年夏休み、冬休みなど年に数回ストックホルムに行き来する生活でした。

公私を兼ねてストックホルムと札幌の2ヶ所で定点観測をしていたことになります。定点観測のメリットは、ストックホルムに居る時は日本に居ては見えない点、そして札幌に居る時にはスウェーデンには見えない点が見えてくることです。

私が札幌に住んでいた四半世紀はいわゆる「失われた日本」の時期でしたが、逆に北欧のさまざまな政策への注目度は世界的に高まって来ています。たとえば、英国エコノミストの2月2日号は「北欧一次のスーパースター」の大きな特集をしました。

世界が北欧に注目する理由を一言で表現するなら、福祉（分配）＋経済（生産）＋持続可能性（総量）を3つすべて手にしている、からでしょうか。

〈教育（改革）〉

私は過去15年ほどは、北欧、とくにフィンランドをヒントとする創造性教育の実践研究にもっとも力を注いできました。

知業の現代は、工業の時代とは違う教育システムが必要である、との確信からです。

知業時代に必要な能力は、何よりも創造性です。そしてクリエイティブなアイデアを実行する能力も大切です。このような考え方から、私はすべての授業における学生の到達目標を創造性と自己効力感（自分でも出来るという確信）の2点に集約してきました。

全国にある東海大学の付属校園では知的財産教育（創造性教育＋起業家精神教育）を展開し

てきました。とくに、付属四高（札幌）での工藤優樹先生とのコラボ、付属本田記念幼稚園（伊勢原）での高橋功前園長とのさまざまなプロジェクトが強く印象に残っています。本田記念幼稚園の園児がピックカサルミ幼稚園児（フィンランド・バーサ）と共同で制作したアニメはフィンランドの国際映画祭で最優秀作品の一つに選ばれました。

近年は参加型の授業にも力を入れてきました。ファシリテーション、ワークショップなどの参加型授業を取り入れることにより、創発、シナジー、集合知の成果がみられ、学生の授業評価からみると、学びやモチベーションも確実に高まりました。

<幸せ>

幸せは人類にとって古くからのテーマです。

しかし20世紀後半から近年とくに幸せへの関心が世界で高騰してきています。

その背景としては、幸せのパラドックス（先進国では所得や経済水準が上がっても生活の満足度が上昇しない現象）、制度疲労の課題先進国 NIPPON、2011年の東日本大震災と原発事故（3.11）、などがあげられます。それらに加えて私個人の関心としては、デンマーク人など北欧の幸福度が世界のトップにあること、北海道民の幸福度、などがあります。

具体的には幸せについてOST（オープン・スペース・テクノロジー、北ヨーロッパ学会＝2012年11月、スウェーデン交流センター＝2012年5月など）、ワールド・カフェ、自主映画会（幸福の経済学、happy）などの幸せについて考えるイベントを開催し、参加者からは高い評価を頂くことが出来ました。

<利他性 altruism>

『利他性の経済学』（館岡康雄、2006）はインパクトのある著作でした。

と一緒に北欧をヒントに北海道において産業

クラスターづくりを導入するお手伝いをさせて頂いた戸田一夫さん（元北電社長、会長、道経連会長）や秋山喜代さん（元秋山愛生館社長）の強い印象が私の眼に焼き付いているのは、自分の会社のことだけではなく、より良い北海道のことを常に考え、行動されていた利他性だからこそでしょう。

2010-11年度に私は内閣府の予算による北海道における社会的企業の起業支援コンペの委員を仰せつかりました。この2年間で123の社会的企業が誕生しました。年齢、性別、地域に関係なく、「社会貢献をするために起業」への関心の高さを実感した事業でした。

学生の間でも社会貢献に対する関心は確実に高まっています。

<多様性 diversity>

創造性は多様性から生まれます。日本社会や若者を見ていると、むしろ一様性の方向に逆行している懸念があります。昭和初期の詩人金子みすゞは「みんなちがってみんないい」と表現しましたが、今日の若者は「みんな同じでみんないい」なのかもしれません。

世界最大の家具チェーン・イケアジャパンの社員（コワーカー）の国籍は30近くもあるそうです。多様性の中からクリエイティブな発想と企業の活力が出ています。Martin Prosperity InstituteのGlobal Creativity Indexによればスウェーデンが世界一クリエイティブ、との結果が出ています。

北海道におけるすばらしい四半世紀を提供して下さった皆様との出会いに私は大切にしている「邂逅（かいこう）」という言葉を使わせて頂きたいと思います。

めぐり会いにありがとう

心からありがとうございました

そしてストックホルムにお越しの時にはぜひ

お会いするのを楽しみにしております。Välkommen !

〈参考文献〉

川崎一彦「北海道と北欧との交流および大学生力を活用した教育プロジェクト②」ビョルク vol.117 (2013.1)

川崎一彦「幸せについてWhy? What? How?」HOPPOKEN vol.161 (2012秋号)

川崎一彦「北海道における北欧との交流および大学生力を活用した教育プロジェクトの実践研究報告」北ヨーロッパ研究 vol.8 (2012)

川崎一彦「コープさっぽろのCSR活動への大きな期待」コープさっぽろCSRレポート2012

〈北海道スウェーデン協会常任理事、東海大学名誉教授〉

川崎教授講演会「北欧の幸せ、日本の幸せ、北海道の幸せ、そして…」

横山 隆

平成25年1月28日月曜日、ホテルモントレーエーデルホフ札幌にて、本協会新年交礼会と常任理事川崎一彦東海大学教授による講演会とワールドカフェ方式による「しあわせカフェ」が開催された。講演の前半は川崎先生による多角的な視点による「しあわせ」の分析、後半は70名ほどの参加者が3人ずつのグループに分かれたワールドカフェ形式のワークショップ「しあわせカフェ」が川崎先生の司会で行われた。

このようなワークショップは初体験の参加者も多く、参加型の楽しい講演会形式に興奮気味の参加者もいて、あっという間の1時間半を過ぎました。参加者の意見を川崎先生が下記のように纏めていただきました。

参加者の気づき、疑問点

〈気づき〉

- 60秒で無駄な言葉を使わないで相手に伝えることの難しさを学んだ。
- ディベートの有用性
- 〈最幸な国〉いい言葉です！ これからどんどん使おうと思います。
- 幸せは自分の考え方一つで感じる事が出来る。
- 幸せかどうかは自分の考え次第。とにかく笑っていれば、幸せはやって来る。幸せは上を見ても下を見てもきりが無い。
- やりたいことを見つけた時の自分に戻ってみよう＝幸せ
- 幸福とは多面的な意味を持っている。
- 幸せといっても、過去の幸せと現在の幸せのどちらを考えるのか？ 私は今の幸せを書いた。
- 目標を持つこと。何かにワクワク興味を持つ時間を持つ。振り返りをする事。
- 日本は課題先進国

〈疑問点〉

- 今の世の中は人間が幸せを求めて作り上げた便利な世の中だが、環境汚染など代償は多大。もし人類にリセットが出来たとしても、人類はまた同じ道を進み、それを幸せと位置づけるのだろうか？
- 個人的充足感とマクロ、社会的満足度の相克がある（寛容な社会）
- なぜ憲法に〈幸せの追求〉がないのか？
- スウェーデンは日本の参考になるか？
- このままでは、子どもの時代には日本はどうなってしまうのか？ 産業全般が沈んでいく。

〈本協会事務局長〉

グローバリズムに負けるな。 いよいよグローカリズムの時代!

当別町、レクサンド市 姉妹都市提携25周年
記念訪問団に参加して

鈴木 岳

昨年の9月に北海道スウェーデン協会員として当別町、レクサンド市 姉妹都市提携25周年記念訪問団に参加してまいりました。スウェーデンの伝統が色濃く残るダーラナ地方にあるレクサンド市を訪ね、あわせて私の前職場だったストックホルムのカロリンスカ大学病院の元同僚達に会い、また同市の高齢者介護施設を見学してきたのでした。もっとも、公的な行事にかこつけて、心のふるさとスウェーデンに帰郷したかった思いも少しあったのですが。

9月5日に本隊とは別便で16時に懐かしのストックホルムに到着。向かった先は一度泊まってみてみたかった、空港近くにあるJumboジェット機を改築したユースホステル(写真1)。以前から気になっていたヴァンドラヘムでした。そこへは無料の巡回バスでいけることが空港インフォメーションでわかりました。スウェーデン語で尋ねたのですが、ホテル名を聞いてクスって笑ってしまいました。だって、Jumboのこと「ユンボ」って言うんだもの。ジャンボじゃなくてユンボね。スウェーデン語でJはヤ行になります。なのでマイケルジャクソンはスウェー語で読むとミハエルヤクソンになる。そんな留学生同士で韻のおかしさを良く笑ってふざけたことを思い出しました。ホテルの一室はこぎっぱりとした2段ベット。シャワーとトイレは共用でしたが、全体にこぎれいで、水回りもよく質素ながら快適でした。スウェーデンのユースホステルは清潔な事が多く、他国に比べて安心して使えます。(写真2、3)そして、早速ストックホルムへ。「○○先生? いまね、ストックホル

ム。ごはん食べにつきあって」と旧知の日本人研究者に突然電話し、一緒に夕食に付き合わせる暴挙にでた。さらに一度も乗ったことのないアールランドエクスプレスを初体験。バスなら1時間のところ、たった20分でストックホルム駅につきました。呼び出した友人とわずか3時間でしたが、市内中心部を散策しながら両国の情報交換をしました。今も外から日本を見つめられる彼らとの意見交換は閉鎖的な日本色に染まりそうになっている私には大変有意義でした。やはり国外からの視点を持ち続けて行くことは自国の短所、長所や異常さを認識する上では重要です。

翌朝の9月6日、当別町のご一行と高級ホテルのロビーで合流。そして、バスでゆられながら北海道の美瑛のような光景をながめながらレクサンドへ。レクサンド市に到着すると大変な歓迎が待っており感激しました(写真4)。私は当別町に特別親しみがあつた訳ではありませんが、異国の市民が日本の小旗をふって、沿道や式典会場前に大勢集まって日本人を出迎えてくれたことに興奮し感激せざる得ませんでした。同時にこれまでの25年間に培われた両市の友好の深さを感じたのでした。同市のウルリカ市長さんは44歳の3児の美しい母でした。その女性市長がさっそうと自分より遥かに目上の男性議長や議員らに指示を出す様子はスウェーデンに帰ってきたことを実感しました。スウェーデンでは年齢や性別、人種に境無く適役が職務を果たせば良い、そして市長だろうが議員だろうが、年齢が違おうが人間として対等という哲学があります。ヒエラルキー意識が非常に低く、適材適所が実現されやすいと感じます(写真5)。

私はアングシュ チュルさんという銀行員のご家庭にホームステイさせてもらいました。幸運なことに彼はレクサンド市の伝統行事やフォークダンスチームのリーダーをやられており、たった1週間の間にたっぷりスウェーデンの心の古里といわれるダーラナ地方の生活に触れることができました(写真6)。忙しい歓迎記

念式典の合間をぬって森へキノコとブルーベリーやリンゴンベリー（こけもも）摘みにつれていってくれたり、巨大な隕石の墜落によりできたシリアン湖を一望できる展望台にハイキングへ連れて行ってくださいました（写真7）。スウェーデンは豊富な自然が身近にあり、生活と自然との距離が近いのです。私も滞在中に一家で森を散策し、キノコを狩ったり、ベリーを摘んだり、そのあとにみんなでシナプス（スウェーデン焼酎）をやりながら日本やスウェーデンの生活を語ったりしたことがずいぶん安らぎになるとともに多くのことを考える時間となりました。自然というのは人を癒し育てくれる不思議な力がありますね。そんな自然から遠ざかってしまった人々は結局自然はおろか自然の構成員である人間をも大事にしなくなるんだと思います。日本を運営する人々は自然から遠くにはなれすぎたかもしれません。自然や人に畏敬の念を忘れ、大事にせぬ国に明るい未来があるとは思えません。

森からシリアン湖を望む雄大な景色をながめ、カフェを飲みながら期せずして政治の話になりました。チュルさんとはとても初めて会った感じがなく、遠い田舎の親戚にでもあったような親近感がありました。チュルさんもそう感じたのでしょうか？ 会って間もないのに政治の話しておおいに意気投合したのです。チュルさんはハンデルス銀行員。小さな政府を指向されているかと思いきや、「アメリカのような資本主義は間違っていると思う。強者に力が集まりすぎ、普通の人々は過労なうえに低賃金で疲弊し、休暇も短くなる、ワークライフバランスも悪い。そのうえ医療も老後も不安が多い。そのようなシステムは人々を幸せにしない。スウェーデンでは適度に働き、家族と集い、旅をし、余暇を楽しむことができる。社会保障も厚い。スウェーデンの方が多くの人々を幸せにできるのじゃないだろうか。」私も彼の意見と全く同じ思いでしたので、つくづく自分はスウェーデンに染まったのだなと再確認するとともに同

志に再会した思いで大変嬉しく思いました。

そんなスウェーデンも福祉のコストカットがすすみ、交流が必要な一人暮らしの老人の社交の機会に予算が削られたり、老人ホームの入居が阻まれたり、といったことにチュルさんは不満を述べていました。老人ホームに入れるのはほぼ自立不可能になった介護度の重い方が主だそうです。自立できるうちは個人宅にヘルパーが訪れる介護様式が主流となったスウェーデンですが、独居老人は必ずしもそれを施設入居よりも良いとは感じていないようでした。自立精神旺盛なスウェーデンの老人でも独居による孤独、不安に悩む方はおられるのです。そんな話しを森でしました。

チュルさん率いるレクサンドダンスグループのフォークダンスはすばらしいものでしたが、高齢化が著しく将来が心配でした。ダンスはすばらしいもので、かっこいいと思うのですが、なかなか若者には人気を得られないようです。私が移住していたら真っ先に加えてもらいましょうか（写真8）。チュルさん自作の牛の角笛も聞かせてもらいました。牛の角は中に骨髄がつまっており、長く煮てから中身をくりぬいて作ったのだそうです。完成当初は大変臭かったそうです。音色はオカリナに近いような、何とも神秘的で霊的な音色でした。これを牧場で吹くと牛達が大興奮して走りよってきたのには驚きました（写真9、10）。

老人介護施設を2カ所で見学してきました。一つはレクサンドの公営施設、もう一つはストックホルムの民営施設でした。正直、レクサンドの施設は病院のような施設で、あまり暖かい感じはしませんでした。部屋の広さや敷地の広さはうらやましかったのですが、それ以外に感心するものはなかったです。ストックホルムの民営施設はずっと洗練された内装で良い雰囲気でした。行事も多くやられているようでした。民営化の効果かもしれません。しかし、日本のイメージと違い、民営化といっても施設の介護収入は全額税収から支払われるため民営だろう

が公営だろうが一緒です。同じ運営資金の中からどうして民間業者が運営するメリットが生じるのか不思議でした。なぜならあまり大きな利益を生じ得ない仕組みだからです。両施設を見学し、もはやスウェーデンにはインフラや箱ものの点で学ぶものは無いと感じました。施設の豪華さできそうなら日本のほうがずっと良い物があります。ただし、豪華な施設ほど利用者負担が増えていく訳ですが、選択の幅があるのは良いことかもしれません。一方スウェーデンは貧富の差を少なく、あまねく十分な介護を提供し、かつ労働者の生活を守るという考えが根底にあります。ですので、限られた税収でこれらを行うためか、選択幅は狭いように思います。

介護施設の箱もの、つまりハードの面で北欧に学ぶことはほとんどなくなったと感じますが、ソフトの面ではまだまだ学ぶことは多いのです。つまり、人が年を取るといふことはどういうことなのか？ そこにどのような環境が必要とされるのか？ そのためにどのような町づくりや施設づくりが理想的なのだろうか？ どのようなことを老人は望むのか。それらを実現するには行政、国民一人一人はどうあるべきか？ そのような介護の本質を問う研究には余念がありません。北欧の介護福祉事業の本質を学びたいのなら、もはや現地見学はそこそこにして、そういったソフトの研究に関する本を読むのが早道です。スウェーデンには日本人移民が多いので、彼らがよく紹介してくれており参考になります。余談ですが、スウェーデンで温めていたアイデアをもとに介護を必要とされるお年寄りが安心して最後まで住み続けられる住まいをこの11月に開業する予定です。苛烈な低コスト競争の日本のなかでどのようにスウェーデン流を実現するか研究中です。ご興味のある方は当院のHPをフォローしてみてください。

さて、このたびの行事では多くのスウェーデン在住邦人にお世話になりました。とりわけ、ケイコ八幡ラーションさんの馬力には頭が下がりました(写真11)。八幡さんの息子さんは長野

五輪の日本アイスホッケーでゴールを挙げた八幡真選手です。さすが五輪選手を育てた母だと思いました。多少、移住を考えた私には移住者なりの大変な苦労があったはずだと容易に察しがつきます。ましてや八幡さんの頃には現在ほど通信、交通は発達しておらず、地球は狭くありませんでしたから。レクサンドと当別町の姉妹都市提携が比類なく強固な陰には八幡さんのご盡力があったとうかがいました。別れの船上で泉停町長が感涙の表彰を差し上げたのもっともでした。

最後になぜ私がスウェーデンの暮らしが良くて、日本よりも幸せを感じたか、そして今後グローバルゼーションの中で当別町はもとより北海道はどう活力を保ち続けて行くことができるのか等について、常々おぼろげに考えていたことに我が意を得るような映画と本をご紹介したいと思います。「幸せの経済学」と「いよいよローカルの時代」です。どちらもヘレナ ノルベリさんの作品です。彼女はスウェーデン人。私がスウェーデンで幸せを感じた理由を端的にまとめるとスウェーデンでは民主主義が息づいていること。そして地域経済が守られ、伝統文化の保護に熱心で人間と文化を大事にする政策が基本であるとかんじたことでした。しかし、これらは強欲グローバリズムからの保護でもあります。その保護が現政権で緩和されつつあり、スウェーデンでの暮らしにも少しずつ競争の厳しさが入り込んできました。ヘレナさん達はグローバリズムがいかに人々から幸せを奪ってきたかを丹念に検証し、グローバリズムへの対抗はローカリズムだと主張しています。幸せという価値観は主観的なものにもかかわらず、強欲グローバリゼーションは強者の価値観の押しつけを地域に強い、幸せだった地域を経済的にも心理的にも強者への隷属を強いて、不幸にしていくのじゃないでしょうか。そのような強者の進めるグローバリゼーションの暴力に悩んでいるのは日本の地方だけではなく、世界中の地方、田舎が苦しんでいます。そのような田舎同士の

ローカルな人々が手を結んで、情報や人や物、文化交流をすすめ励ましますグローバルな結びつきと連帯を広げて行く、つまり当別町とレクサンドのような“グローカル”な運動がTPPをはじめとした強者の進めるグローバリゼーションに対抗する手段となるかもしれないと感じます。

この度はレクサンド市と当別町の皆様、東海

大学川崎ゼミの皆様大変お世話になりました。紙面をお借りして感謝いたしますとともにますますのご発展を祈念いたします。また、今後も微力ながら当別町とレクサンド市の姉妹都市提携を応援し続けたいと思います(写真12)。〈本協会会員 医療法人社団 鈴木内科医院 理事長、院長〉



写真1. ホテル「ジャンボ」



写真2. ジャンボの廊下。両側に居室があります。



写真3. コックピットが食堂です。朝食と軽食、飲み物が提供されます。



写真4. レクサンド市庁舎前で大勢が歓迎してくれました。



写真5. 左からチュルさん、ウルリカ市長、チュルさんの妻キッキさん



写真6. チャーチボートの再現。船尾で指揮をとるのがチュルさん

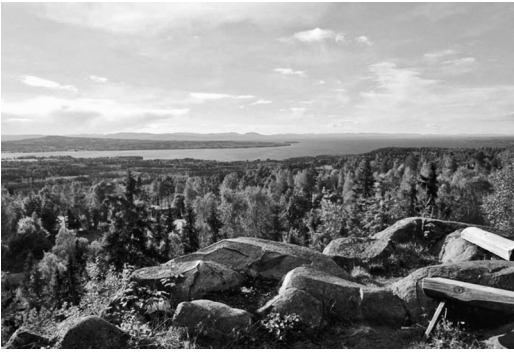


写真7. 小山から一望したシリアン湖。巨大隕石の衝突でできた湖です。



写真8. 記念式典で披露されたチュルさん率いるフォークダンス。世界中へ招かれたことがあるそうです。イラクのフセイン大統領の宮殿でも踊ったことがあるそうです。



写真9. カンタレルキノコの群生。チュルさん秘密の場所へ連れて行ってくれました。



写真10. カンタレルとリンゴンベリー（こけもも）の収穫。リンゴンはジャムにして食べました。甘酸っぱくてスウェーデンの肉団子によく合います。



写真11. ケイコ八幡ラーションさんと



写真12. 歓迎夕食会が開かれたデンマークの童話作家アンデルセンが住んでいた家

ヴァリエ大使ご夫妻が 阿寒湖を訪問

墨谷和則

去る10月20日と21日に駐日スウェーデン大使のラーシュ・ヴァリエ氏とその奥様が阿寒湖に

ある一般財団前田一步園財団を訪れました。当協会常任理事の川崎教授とその奥様、そして私墨谷も同行させていただきました。

当初前任のステファン・ノレーン前大使が訪問の予定でしたが、3.11の大震災の影響で訪問を延期した経緯があります。ノレーン前大使の的確な引き継ぎと、川崎教授の強力なご尽力があって、大使交替にも関わらず今回の訪問が実

現しました。

前田一步園は今年で財団設立30周年になります。この記念事業を行うにあたり3年前から委員会および専門委員会を立ち上げ、種々検討を重ねてまいりました。当初から森林の活用について議論をしてきましたが、その中の一つに北欧特にスウェーデンの森林の活用に目を向けようという動きがありました。特に青少年の育成に森林を活用できないかと。

これら一連の動きの中で、スウェーデン大使をお招きし、財団の所有する森の中を実際に見て歩いていただき、そしてアドバイスを頂き30周年記念事業および今後の財団運営に生かそうというものです。

20日に丘珠空港から空路（サーブ社製）で釧路空港に到着。阿寒湖には夕方到着し、前田理事長他財団関係者および観光協会の歓迎を受けました。

夕食には北海道の食材をふんだんに使った料理が並んだ他、阿寒湖名物のシカ肉料理も楽しめました。サプライズはザリガニ料理です。スウェーデンでは日常ザリガニを食べる習慣があるのは皆さんご存知のとおりです。日本ではウチダザリガニは外来種として駆除の対象です。阿寒湖では環境省の許可の上で漁業組合がザリガニを捕獲し、茹でたザリガニを冷凍保存の形で出荷しているとの事。輸送途中などに逃げ出さないようにだそうです。そんなザリガニが出てきたものですから大使ご夫妻も吃驚、そして大喜び。我々と比べ物にならないほど上手に召し上がっておられました。

さて夕食後は文化体験です。阿寒湖には120名程のアイヌの方が集落（アイヌコタン）を形成し住んでいます。その一番奥まったところに阿寒湖アイヌシアター「イコロ」があります。ここでは毎夜アイヌ古式舞踊が披露されています。大使ご夫妻も「丹頂の舞い」などの舞踊を楽しめました。

次の日21日は生憎の小雨模様。朝早くから財団所有の森林の散策に出かけました。今年の夏

が暑かったせいで紅葉もまだ所々に残っており、小雨がぱらつく中にも関わらず森の良さを余すことなく楽しめました。財団の森には湖に流れ込む小河川が幾本もあります。残念ながら幻の魚「イトウ」は見られませんでした。が、「アメマス」の遡上を間近で見ることが出来ました。

阿寒湖と言えば「マリモ」です。天然記念物ですので触ることは勿論、その生息地に近寄る事も禁じられています。今回は大使ご夫妻が来られたということで、「マリモ」の世界的研究者若菜博士に特別に船を用意していただき、その生息地チュウルイ湾に入る事が出来ました。残念ながら天候の影響で湖の透明度が悪く、船上からは見る事が出来ませんでした。岸に打ち上げられた「マリモ」を大使ご夫妻も手にとって見る事ができ貴重な体験をしたと喜んでおられました。打ち上げられた「マリモ」は時々見回り湖に返してやるそうです。そしてその「マリモ」はまた成長を続けるそうです。

森の視察も終わり、昼食をいただきながら、阿寒湖の印象等々話に花が咲き、財団の30周年記念事業への協力をお願いしながら帰途に着きました。前日夕方から次の日のお昼までという短い時間でしたが、故郷スウェーデンを思わせるような阿寒湖の雄大な自然を楽しまれたことでしょう。

その後、30周年事業の専門委員会では、アウトドア環境教育の教師・先生を育成する場としての森の活用を纏めました。今後これを受けて専門委員会の座長から理事長に答申し、評議委



員会、理事会の審議を経て財団としての方向性を決めることになっています。

〈本協会常任理事〉



講演会「欧州に学ぶ脱・無縁社会への挑戦」

横山 隆

5月21日月曜日、本協会の平成24年度総会に引き続き、三菱総研プラチナ社会研究センター主任研究員の松田智生氏による「欧州に学ぶ脱・無縁社会への挑戦」と題した講演会を開催しました。本講演会は（公）北海道国際交流・協力総合センター（HIECC）との共催で、一連の「北方圏講座」シリーズの中に位置づけていただきました。

ホテルモントレーエーデルホフ札幌の会場には、総会に出席された19名の会員の他、40名ほどの一般参加者がありました。講演を頂いた松田智生氏は、慶応大学法学部政治学科卒業、専門は高齢化社会における新産業創造・地域活性化・コミュニティビジネス。2010年に三菱総研の新たな政策提言プロジェクト「プラチナ社会研究会」を立ち上げられました。講演の中で一貫して強調されていたのは、「高齢者は決してコストではなく、これからの社会の担い手」、「高齢者の社会ではなく、全世代が幸せに暮らす成熟社会を目指す」ということ。松田氏の講演の要旨を以下のように纏めました。

2010年の時点で日本の高齢化率は23%に達し、今後3年間で約800万人の団塊世代が上乗せされる。この人達は、ひとりひとりが今後20年間で10万時間にもなる自由時間を持っており、この時間をどう過ごすかが日本の高齢社会の方向性を決めることになる。

現状のままで放置すると、現在既に36兆円に達し、なお毎年1兆円のペースで増え続けている医療費が更に膨らんでいくことは避けられず、税収が40兆円そこそこしかない事実を踏まえると、現状のパラダイムのままでは問題解決は不可能である。

高齢者に対する見方を根本から変え、彼らを

社会のコストでは無く、逆にこれからの「社会の担い手」と見なし、生き生きと元気に暮らしてもらうことが重要である。そのために必要なのが「生きがい」で、自分が社会の役に立ち社会から必要とされていると実感することが高齢者の生きがいに繋がる。ここでフランス、スウェーデン、米国での実例をあげて、対策の方向性を紹介したい。

(1) 多世代交流の視点1：フランスの世帯間同居

独居高齢者と学生が同居する「ひとつ屋根・ふたつ世代」政策を、連帯・社会団結省とパリ政治学院が連携して作った。発端は2つの社会問題。2003年、猛暑に見舞われたフランスでは15,000人の死者を出し、その多くが独居老人だったことにフランス社会は衝撃を受けた。また、もう一つの社会問題は学生の居住費の高騰と孤独。この2つの社会問題の解決策として独居老人と若者の同居政策「ひとつ屋根・ふたつ世代」は考えられた。

同居のパターンは幾つかあり、学生が家主のお年寄りと週6日、一緒に食事するパターンで、この場合学生の家賃は夕食代も含めて無料となる。また、週1日だけ夕食を共にし、買い物支援などを行う同居パターンで、この場合月100ユーロの家賃が必要。部屋だけを賃貸で貸し出すパターンもあり、家賃は相場より約3割程度安い。自治体は独居高齢者の見守りコストを削減し、学生は家庭的な暮らしを格安で享受できるメリットがある。高齢者も孤独が解消され、学生のために食事を作ることにより生きがいも得られる三方一両得の政策だ。フランスでは既に1,000組以上の同居が成立し、「単なる不動産仲介ではなく絆の契約を斡旋」するという自負を持ったNPO法人や民間企業が、市場で生き残るために真剣に老人と若者のマッチングを手がけている。

(2) スウェーデンに学ぶ～シニア劇場による団地再生

スウェーデン南端の都市、マルメ市は人口30万人の港町で、衰退した造船業に代わり新エネルギーやITへの産業構造転換と共にオールドタウン問題に新たな取り組みを行っている。マルメ市アウグステンボリ地区での団地再生では、屋上緑化・生ごみのバイオマス化などのハード面に加え、ソフト事業として団地内にある「アウグステンボリ劇場」というシニアが歌い踊る小さな劇場を運営している。高齢化社会というと、とすれば介護や見守り等、健康や安全と言った基礎的な欲求充足に目が行きがちだが、このシニア劇場は、劇場を通じて誰かと繋がる「親和」、歌や劇で誰かから認められる「承認」、自分の晩年に何かに夢中になる「自己実現」といった高次の欲求を充足させる場になっている。

シニア劇場は市の住宅公社が運営し、観客は無料、舞台に立つシニアもボランティアで無報酬。演出家の報酬や運営費は掛かり事業自体は赤字であるが、引きこもり予防、寝たきりや鬱病の減少による医療費の抑制、集う場造りによる団地の活性化や消費増加等、社会的にも経済的にも有益である。このシニア劇場がアメリカの話ではなく、日本と似て控えめな気質のスウェーデンで行われていることに注目したい。

(3) 米国の大学連携型コミュニティ

米国のリタイアメント・コミュニティは、ゴルフ場を中核として住居、娯楽、医療などが整備されたアクティブシニアのための街であり、フロリダ、アリゾナ、カルフォルニアなどの温暖な地域で開発・運営されている。全米に1,000ヶ所以上あると言われているシニアの理想郷にも大きな盲点があった。第一に「世代の偏り」で、若者の非行と喧噪を避けた結果、街の活気と多様性が損なわれた。第二は「知的刺激の不在」で、快適過ぎる環境によって頭を使わなくなることから、急速に衰えてアルツハイ

マー病などの認知症のリスクが高まった。

第一世代のコミュニティの課題「世代の偏り」、「知的刺激の不在」を解決したのが、第二世代の大学連携型コミュニティである。このコミュニティは大学の敷地内や近隣に設置され、ここに居住するシニアは生涯学習講座で学び、再びキャンパスライフを体験することができる。このような大学連携コミュニティは全米で70ヶ所ほど存在し、入居条件として年間450時間以上の講義受講を義務付けるマサチューセッツ州ラッセル・ビレッジのような例もある。他の大学では、シニアが講師になる講座もあり、元弁護士や元投資銀行家、元エンジニアが、学生のキャリア・アドバイザーになり、学んだり教えたりする充実感や「誰かの役に立つ」生きがいを感じている。

アイビーリーグの名門ダートマス大学の近隣「ケンダル・アット・ハノーバー」では26万平方kmの広大な敷地に約400人が暮らし、平均年齢は84歳（米国の平均寿命79歳）で、80%以上が

元気であるとのこと。居室は健常者用、軽介護用、重介護用、認知症用の4タイプに分かれたCCRC（Continuing Care Retirement Community）と呼ばれる施設で、居住者は健康状態が悪化しても同じ敷地内でケアを受けることができ、安心して暮らし続けることが可能である。入居率は98%、地元で約300人の雇用も産み出している。

まとめると、高齢者とは、生きてきた歳月の分だけ経験や智慧、人脈を持ち、数千万円単位の金融資産を築いた人も多く、この有形無形の財産を活かすことが大切です。高齢者が社会の担い手になりつつ、ミドルも若年層も多世代がプラチナように輝きながら希望を持ち、暮らす成熟した社会を目指したいと考えています。このプラチナ社会実現のカギは、多世代交流の促進にあると考えます。

（本稿は、松田氏による講演内容と著作を元に、事務局横山が纏めました。）

講演会「未来のために今日本とスウェーデンが出来ること」

横山 隆

2月21日木曜日、在スウェーデン日本国特命全権大使渡邊芳樹氏をお招きし、北海道大学学術交流会館に於いて「未来のために今日本とスウェーデンができること」と題した講演会を開催しました。

この講演会は、当初、当協会常任理事川崎東海大学教授のお骨折りで在日本スウェーデン王国ヴァリエ大使と渡邊大使の対談として計画されていましたが、ヴァリエ大使に公務出張の予定が入り、渡邊大使単独の講演会に急遽変更されたものです。

渡邊大使は、「次世代・未来志向の国づくり」と題したスライドで、福祉国家スウェーデンが高い経済競争力を維持している現状を説明した。スウェーデンは高福祉高負担の高社会サービスの福祉国家から、弱者に配慮しつつも、法人税減税など企業競争力の回復策や雇用の増大を促す政策に舵を切り始めていると語った。また、渡邊大使は、スウェーデンは社会に対する強い信頼と過剰なまでの個人主義が共存する「国家個人主義」とも言うべき国民合意を基本に国づくりを進めているとも説明した。

スウェーデンでは、日本の高齢化率が世界一位であることを踏まえ、日本の高齢化社会対応策や科学技術への関心が高く、官民間わず環境技術や社会福祉の分野で交流を深める必要性を述べた。(詳細は、渡邊大使が用意されたスライド参照)

ヴァリエ大使は、現地時間20日の夜にマールシャル諸島を飛び立ち、日付変更線を超えてホノルル空港、再び日付変更線を超えて成田空港へと乗り継ぎ、21日16時半に新千歳空港に到着された。18時過ぎから北海道大学百年記念館で開催されたレセプションに参加し、長旅の疲れも

見せず、渡邊大使と「日瑞外交関係150年(2018年)にむけて何ができそうか?」とのテーマのミニ対談をレセプション会場で精力的に行って頂いた。

日瑞外交関係が樹立されたのは1868年だが、当時、ノルウェーはスウェーデンと同君連合の状況であり、ノルウェーなどの隣国が日瑞外交関係150年をどのように捉えるか確認の必要があると、渡邊大使が述べた。また、1873年(明治6年)4月24日～29日にスウェーデンを訪問した岩倉使節団の足跡に、改めて光を当てる必要があると両大使の意見が一致した。日瑞外交関係150年に関連したイベントを計画することには、両大使とも賛成で、ヴァリエ大使は、「平和、安全保障」「創造性を育む教育」「人間国宝などの無形文化財」「文学」「高齢者ケア」「国土インフラ整備」などをテーマ候補として挙げられた。渡邊大使は、「平和、自由、人権、民主主義などの普遍的価値への両国の取り組み姿勢」「過去20年の日本経済は、先進諸国中、失われた10年を経験した訳では無かった→強靱な対応力」「世界のどの国も対応不能と見る超高齢化社会→2050年のスウェーデンの高齢化が現実の物となっている日本の驚異的対応力」などで価値ある協働を提言した。また、1935年に王子製紙よりストックホルム民族博物館の庭に寄贈された茶室「瑞暉亭」の改築などの具体的テーマも併せて提示された。

最後に、日瑞両国の識者による賢人会議などを開き、意見を聞いてはどうかとの提案が両大使からなされた。

レセプション終了後、渡邊大使は懐かしいふるさとの人々(岩見沢)との懇談。ヴァリエ大使は羽田行き最終便に搭乗すべく、新千歳空港へとんぼ返りされました。新千歳空港への車中、ヴァリエ大使もお疲れが出たのか微かに寝息を立てられ、本当に長かった2日間の旅の最終行程に安堵された様子でした。本協会会員一同より、ここからの謝意を両大使に表したいと思います。

〈本協会事務局長〉

スウェーデン 一次世代・未来志向の国づくり



在スウェーデン日本国特命全権大使
渡邊 芳樹

スウェーデン—新しいモデル(ポイントのみ)

—2012年10月13日付ロンドン・エコノミスト掲載—

- スウェーデンモデル(福祉国家モデル)は再分配を基礎とし、かつては人々は高い税を支払い、代わりに多くの社会サービスと大きな所得移転を得たというものであった。
- 社会・時代の変化とともにこのモデルは変化してきており、特に2006年の中道右派政権は、低所得者に配慮した社会サービスの提供を行いつつ所得移転(現金給付)を削減し、就労促進につながる減税を進めてきている。
- この修正モデル(新しいモデル)の下で、スウェーデンは不平等(格差・貧困)の拡大を抑えつつ政府の効率化を進め、堅実な成長に成功している。国民性・国の形が違う他国にそのまま適用できるものではないが、大いに参考になる。

(注)スウェーデンのGDPは、一世代前と比べて約25%上昇した。野党党首は中道右派政権はスウェーデンをアメリカに似たように主張する。
アンデリュル財務大臣はこれを強く否定する。スウェーデンは不平等な給付を基礎とする社会から、ごくわずかな不平等の上昇とともに、活発な近代な経済に移行したのだ。その経験は活性化と平等は天賦にかけられる必要がないことを示していると思う。
事実が敵の主権を証明している。規制緩和、予算規律、そして福祉国家の大規模な修正のおかげで、スウェーデン経済は金融危機以後の20年、変化してきている。新たなスウェーデンモデルは左派のステレオタイプのものとは全く異なる。



スウェーデン国歌

Sveriges Nationalsång

Du gamla, Du fria, Du fjällhöga nord
Du tysta, Du glädjerika skönel
Jag hälsar Dig, vånaste land uppå jord,
Din sol, Din himmel, Dina ångder gröna,
Din sol, Din himmel, Dina ångder gröna.

Du tronar på minnen från fornstora dar,
då året Ditt namn flög över jorden.
Jag vet att Du är och Du blir vad du var.
Ja, jag vill leva jag vill dö i Norden.
Ja, jag vill leva jag vill dö i Norden.



「自由と尊厳と責任」の政治へと政治の風景が大きく転換している。しかし、「国家個人主義」と言われるほどの「社会(政治・政府及び国民相互)に対する強い信頼」と「適度なまでの個人主義」の共存の「ラフボックス」は、市場経済と個人主義への権利を強めながらもスウェーデンモデルの不变の基礎として機能を発揮している。

【総括的認識】

「平等と違等と安心」の政治から「自由と尊厳と責任」の政治へと政治の風景が大きく転換している。しかし、「国家個人主義」と言われるほどの「社会(政治・政府及び国民相互)に対する強い信頼」と「適度なまでの個人主義」の共存の「ラフボックス」は、市場経済と個人主義への権利を強めながらもスウェーデンモデルの不变の基礎として機能を発揮している。

1920年代の「国民の家(folkhem)」構想以来築かれてきた高度の「福祉国家」であっても、常に未来志向でイノベーションと競争を重んじる国であり、一般に好まれる「丁度良い中庸の国(landets lagom)」ではない。一方、強烈な個人主義ではあっても、少し遠慮がらで他者のコロナポジションを大事にする。国内に諸問題は抱えていても、困難に耐え、自力で乗り切る「我慢強さ」と「斬新な発想」と「開放性」により伝統的価値観から脱却して発展する「進取の精神」を特徴とする国が形造られている。

そうした基礎に立って、90年代の極めて深刻な金融危機を我慢強く強力的且つプラグマティックに乗り越えた経験を活かし、現在もスウェーデンは強靱な対応力で国際経済の激動を乗り切っている。

なお、外交政策面では伝統的「中立」のイメージを活かしつつ、EU・NATO等との「国際連帯」へ軸足を移している。また、社会政策面では、就労第一原則の下に、各給の減税措置や市場経済ルールへの広大な活用とともに、積極的移民政策が展開され、財政政策面では、健全財政原則を堅持しつつも、緊縮政策を回避し、「未来への投資」を怠らぬ努力が行われている。

次のスーパーモデル

なぜ世界は北欧諸国を見なければならぬか

政治家は右派も左派も北欧諸国に学ぶことができる
北欧は、世界中の政治家—特に政府支出に詳しい左派陣営—に公共部門改革と雇用の効率化—対応力向上の青写真を提供している。



2013年2月2-8日 エコノミスト誌

長靴下のピッツェから私立学校へ

1970-80年代の北欧は高い税金と支出の面で、長靴下のピッツェのアストリッド・リンダグレンは所得の100%以上の税金を支払った。しかしこのモデルは機能せず、それ以降、北欧諸国は右へ方向転換し、スウェーデンのGDPに占める政府部門の割合は約18%低下した。

「公共サービスについても、スウェーデンでは意図的私立学校が公立学校と競争している。選択の自由に関しては、ミルトン・フリードマンはワシントンよりもストックホルムの方がつづけたらう。」

北欧諸国は、競争重視の資本主義と大きな政府の組合せが実現可能だと証明している。労働者の30%が公共部門で雇用する一方、介入の誘惑に負けない明確な自由貿易主義者である。スウェーデンはサブを極度まで、ボルボはいまや中国の官制汽車の傘下にある。

スモーグスボードの醜い部分

新たな北欧モデルは完璧ではない。北欧諸国のGDPの公共支出はまだ持続可能な水準を土崩し、課税水準の高さは起業家の国外流出を助長し、多くの国民—特に移民—が社会保険に頼って暮らしている。

それでも、さらに多くの国が北欧諸国に目を向けるべきである。西側諸国は、かつてスウェーデンのように大きな政府の規制に迷った。北欧が学ぶべきことは、理念的なものではなく実際のものである。社会保障国家に市場メカニズムを注入することは可能である。右派と左派の慣行を捨て、政治的特権を捨てて良策を探さなければならない。世界はこれ先何年も北欧モデルを研究していることになるだろう。

ダボス会議出席に際してのラインフェルト首相、ボリ財務大臣、カールソン国際開発協力担当大臣連名の投稿記事(概要) [2013年1月25日D1紙]

- 我々は欧州における景況を懸念する。引続きと製造の双方が必要であると考える。投資家と消費者双方に再び支出させるため、財政再建が必要とされている。福祉システムを改革し欧州インセンティブを高めるといった構造改革が必要とされている。既に巨大である財政赤字と債務水準を拡大せず、経済を刺激することは可能である。欧州の第一歩は、税にサービスとデジタル市場は大きな潜在力を有している。加えて、斬新な自由貿易協定が重要な刺激となり得るだろう。2015年には世界の経済成長の90%がEU以外の国によって生み出される見込みである。2009年には新興国の生産が世界のGDPの60%を占め、加えてEUの輸入の35%分の輸出品への投資に用いられることとなる。関税はEU製品の価格を上昇としないことにならない。

●スウェーデンは良い状況にある。公的財政は欧州の中で最も強固である。そのおかげで、多くの欧州周辺国が実施せざるを得ない歳出削減や増税を避けることができる。2007年以降の平均経済成長率はユーロ圏諸国と比べて9倍高い。もし2006年以降のEU諸国と同様の低成長にあったとしたら、2013年に福祉と雇用を投入する1000億ユーロを失っていたらう。

●スウェーデンはまた、高い競争力を有しており、これはいくつもの国際比較で証明されている。我々は世界中でも多数の研究開発に大きな投資を行う国である。単位当たり労働力はユーロ圏が20%以上高くなる一方で、スウェーデンは20%低下している。しかし安心してつづけている余裕はない。グローバル競争の時代、競争は常に激化している。中道右派政権はスウェーデンの成長の基礎となる部分を強化するため、今年度の予算で230億ユーロ規模のインフラ、研究イノベーション、起業支援、若年者就業対策に係る重要な投資を行った。危機における法人税の引下げ企業家のスウェーデンへの移転を促し、スウェーデンに雇用をとり、1000億ユーロの税収が守られる。我々はスウェーデン、そして世界の重要な将来課題に直面している。スウェーデンは責任ある。そして改革に焦点を当てた財政政策のおかげで、良好なスタート地点に立っている。我々の任務は共にその発展を継続させていくことにある。

スウェーデンと欧州連合 (EU)

1. EU加盟の背景

- 1995年、EU加盟(伝統的な非同盟中立政策を「軍事非同盟」へ再定義)
- 冷戦終結による国際環境の変化に伴う外交的孤立化を回避、欧州加盟政策へ積極変更、欧州内における影響力の確保。
- EFTA(欧州自由貿易連合)→EFTA(欧州経済領域)へ発展する過程
- 90年代半ばの金融経済危機→国内金融経済の安定を図る。
- EU加盟に伴う国内世論の分裂
- 国内主要政党はEU加盟を支持する一方、EU加盟是非を問う国民投票では、賛成52.2%、反対46.8%と国内がふたつに割れるも、EU加盟を棄たす。

2. 非ユーロ、スウェーデン・モデルの環境に対する懸念

- ユーロに対する懸念心
- 2003年ユーロ導入を問う国民投票では、賛成42%、反対55.9%と否決。
- 通貨主権を放棄することで、スウェーデンが独自に進め得た高水準の社会保障制度、金型決定が異なるなれど、EU内における重要位置。
- 拡大化するブルジョア的な管理階級(EU内の民主主義の欠如)や、EU政策決定過程における透明性の欠如が、EUに対する懸念へと変化。

3. スウェーデンとEUの戦略的關係

- EUの中のスウェーデン
- EUに対する国内の支持・関心は、その他の加盟国と比較して高くはない「消極的な加盟国」である一方で、一度策定されたEU内の改革は、着実に実行に移す「優等生加盟国」。
- ドイツ、フランス、英国に次ぐ第4位の重要な加盟国。EU理念である「民主主義・自由貿易・基本的人権」を積極的に推進する策策と、中規模国家としての存在感を低位に保つためのプラグマティックな戦略を持つ。
- スウェーデンから見たEU
- 外交安全保障の安定、自由貿易の域内拡大を通じた利益の確保とプレゼンスの拡大。
- リストラ(兼)譲渡の項(Solidarity Clause)を通じて自国の安全保障を確保。

スウェーデンにおける対日世論調査結果(抜粋)

実施時期:平成23年3月(東日本大震災以前)
 対象数:1000人
 方法:ウェブ(メール)調査
 男女比:50%、50%

※当節注:2014年から義務教育及び高校教育において、第2外国語として中国語が加えられた(2012年)

問:アジア地域の中で次のどの国・地域がスウェーデンに最も重要ですか。(回答は2つまで)

国・地域	重要性 (%)
日本	70
韓国	35
中国	15
インド	10
タイ	5
シンガポール	5
インドネシア	5
フィリピン	5
オーストラリア	5
ニュージーランド	5
東南アジア	5
南米	5

先住民(サーミ)

1. 概要

スκανジナヴィア半島北部から半島に至る4か国に分布しており、人口は全体で約8万人。国別ではノルウェー約4万人、スウェーデン約2万人、フィンランド約6千人、ロシア約2千人と推計されている。独自の言語(サーミ語)を持ち、トナカ(馴鹿)放牧や狩猟、漁業などを伝統的に産業としてきた。

2. スウェーデンのサーミ政策

(1) 基本法

2011年1月施行の基本法(憲法)改正により、サーミを民族として認め、サーミが自らの文化的・共同体的生活を維持・発展する機会を促進する国が責任を持つことを規定。

(2) サーミ議会(Sami Parliament)

サーミ議会法に基づき、1993年に設置。議席は31で、議員は選挙で選ばれる(任期4年)。主な役割は、政府の補助金や基金の管理、サーミ学校の理事任命、サーミ語・文化・経済活動の振興、サーミの利益に関わる計画への参画など。

(3) 北極評議会

先住民団体との対話は北極評議会の重要課題の一つであり、4か国のサーミにより構成されるサーミ評議会(Sami Council、ノルウェー・カザンショウ)が北極評議会の常時参加者となっている。(※北極評議会(Arctic Council)、北極圏諸国により構成される政府間協議体で、北極圏の先住民団体も参画)

スウェーデンにおける対日世論調査結果(抜粋)

問:日本とスウェーデンが今後関係を強化していくべきと考えられる分野はどれですか。(複数回答)

(以下、選択肢13のうち上位7位)

分野	重要性 (%)
科学技術分野における協力	65
環境などの地球規模の課題解決への貢献	55
経済関係強化、自由貿易協定	50
高齢化社会への対応を含む社会保障分野	45
基本的人権など普遍的な価値の世界的普及	40
文化交流	35
人的交流(ワーキングホリデーの実施など)	30

北極圏国では世俗的合理性と自己表現に価値を置く考え方が支配的

2011年オクスフォード・エニフ・調査による(オクスフォード・エニフ・調査 World Value Survey 2009年)

スウェーデンの内政(概要)

国会は一院制。45%が女性議員。
 2006年選挙以降2期連続で、穏健党を中心とする中道右派連立4党が政権を担う。ただし2010年選挙では議席数が過半数に満たす少数与党政権となり、安定的な政権運営が課題。議院内閣制。
 首相はフレア・ドレック・ラインフェルト。24人の閣僚のうち半数以上(13人)が女性。
 野党は赤緑連合3党の他、2010年、移民政策反対を唱えるスウェーデン民主党が初の議席獲得。

与党連合	議席数
穏健党	107
自由党	24
中央党	23
キリスト教民主党	19
赤緑連合	
社民党	112
環境党	25
左翼党	19
スウェーデン民主党	19
無所属	1

総議席数349(与党173、野党176)

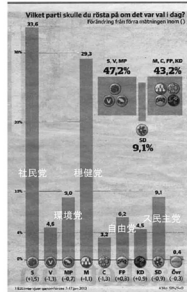
ラインフェルト首相(社民党)はスウェーデンのどしどしが首相として歴任している人物(7年。2012年12月14日引退)

ラインフェルト首相: 64:36 (ラインフェルト)

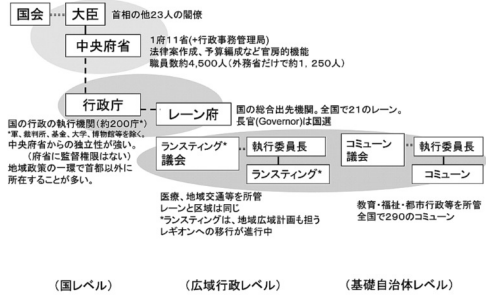
国内政治風景の変化

2013年1月26日NHKの調査 (1)内は前回調査との比較

「今日、国会選挙があったら、あなたはどの政党に投票しますか？」

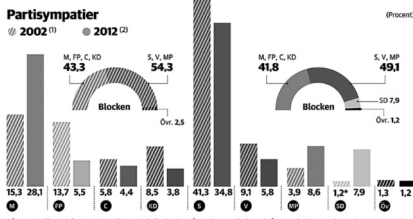


スウェーデンの統治機構



(参考) 政党支持率の昔と今

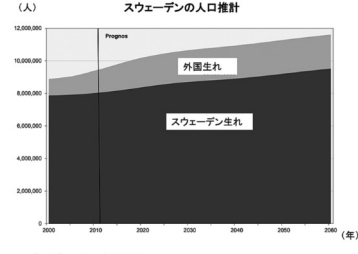
2002年、社民党が直近で最後に勝利した年の11月世論調査
2012年、11月世論調査



（注）M=中道党 FP=自由党 C=中央棟 KD=キリスト教民主主義
S=社民党 V=左翼党 MP=環境党 SD=スウェーデン民主主義
○=その他

人口が増大するスウェーデン

・スウェーデンの人口は今後も増大する見込み。(移民による増大が大きく寄与)



2012年 アルメダールン政治集会週間

2012年7月1日～8日に開催されたアルメダールン政治集会週間における種健党と社会民主主義の主張

種健党

職務協定 (Job Pact)
労働協定の協定に基づき、未経験の若年層に雇用機会を与えるとともに、一定の時間を教育に充てる新たな若年失業対策。政府は社会保険料負担の軽減により協定の実施を支援し、3万人の若年雇用創出を図る。
※社民党、労働組合もJob Pactの提案を評価。

歳出政策
今年の秋予算において、財政の健全性を背景に長期的な成長と雇用の基礎となるインフラ・研究への投資を拡大。
ラインホルム首相

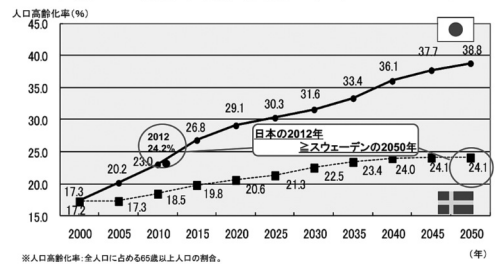
社会民主主義

持続可能な自由 (Sustainable Freedom)
"Do your duty = claim your rights."
「義務」と責任を重視した。社民党の新たなスローガン。(Duty = 自分の教育、就労及び納税並びに互いの自由と責任)
• Society for All = 3E (就業前児童、企業家、有償労働者)
• 身障の失業問題への取組みは単なる選挙対策
党首就任後初の演説
Svの紙が「安定しているが、記憶に残るものではない」とする一方、DN紙は前任者の左派陣から中道寄り路線へと踏み出したことを評価。
レイヴェン 社民党党首 (非議会議員)

※アルメダールン政治集会週間とは
ゴットランド島(バルト海南部にあるスウェーデン領の島)で、1968年以降毎年開催されている政治集会。7月初めの1週間、国内各政党やNGOなどが集会、セミナーを開き、各党首らが政策演説を行う。

高齢化の進展の比較

・高齢化の進展について、現在の日本はスウェーデンの2050年の姿。
・ただし、80歳以上人口の割合をみると、両国は近い姿。(2010年 日本:6.2% スウェーデン:5.3%)



※人口高齢化率: 全人口に占める65歳以上人口の割合。
【出所】 日本: 国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」(平成24年1月推計) [出生中位(死亡中位)推計] スウェーデン: 統計庁資料

北海道スウェーデン協会 平成24年度の主要行事

- 4月23日月曜日
常任理事会（アラゼン）
- 5月21日月曜日
平成24年度理事会、総会、講演会及び懇親会
〈総会出席者19名〉
—講演会—
「欧州に学ぶ脱・無縁社会への挑戦」
講 師：松田智生氏（三菱総研）
参加者：60名
共 催：北方圏講座
（ホテルモントレーエーデルホフ札幌）
- 11月15日木曜日
スウェーデン照明セミナーに協賛
講 師：遠藤かおり氏（ストックホルム在住
照明デザイナー）
参加者：70名
主 催：照明学会北海道支部
（地下歩行空間イベント広場）
- 12月4日火曜日
常任理事会（アラゼン）
- 12月9日日曜日
第19回スウェーデンルシアを迎える会に協賛
参加者：800名
主 催：2012スウェーデンルシアを迎える会
（恵庭市民会館大ホール）
- 1月28日月曜日
新春講演会および新年交礼会
—講演会—
「スウェーデンの幸せ、日本の幸せ、北海道の
幸せ、そして」
講 師：川崎一彦教授（東海大学、本会常任
理事）
参加者：70名
共 催：北方圏講座
（ホテルモントレーエーデルホフ札幌）
- 2月4日月曜日

第64回さっぽろ雪祭り国際雪像コンクールに
出場のスウェーデンチームを激励
参加者：4名

- 2月21日木曜日
在スウェーデン渡邊大使による講演会
「未来のために今 日本とスウェーデンが
出来ること」
講 師：渡邊芳樹氏（在スウェーデン特命全
権大使）
参加者：100名
レセプションにはヴァリエ駐日スウェーデン
大使も出席
共 催：北方圏講座
（北大学術交流会館、北大百年記念会館）
〈事務局長〉

さっぽろ雪まつり国際雪像 コンクール惜しくも4位

2013年第64回さっぽろ雪まつり期間中に開催された第40回国際雪像コンクールは、2月4日～7日の制作期間に10ヵ国10チームの参加を得て行われました。我がスウェーデンチームは健闘し4位の成績を納めました。昨年の準優勝チームが今年も引き続き来日したこともあり、優勝の二文字も期待されましたが、他国もレベルアップし、4位の成績に甘んじざるを得ませんでした。

制作した雪像は「凍った荒野」と題し、スウェーデンの最北部に広がる手つかずの荒野を表現しています。凍った林の中に、ヘラジカ（ムース）が佇んでいる静謐な構図となっていました。

制作チームは3人で構成され、キルナ市に冬季のみ営業する氷の宮殿「アイスホテル」の制作メンバーでもある3人は、極北の地の風景を大変誇りに思い、「凍った荒野」の風景の再現を試みたそうです。Jens Thomas Ivarsson氏、Christian Stromqvist氏は昨年の準優勝チーム

のメンバー、新たにArne Bergh氏を加えた3人ともデザイナーとのこと。昨年の準優勝メンバーの一人Kari-Johan Ekeroth氏は、今回も来日しましたが、記録係に徹していました。(制作チームの人数制限は3人とのルールにより)

スウェーデンチームの初参加は1982年第9回からとのことですが、今回出場チーム中、最多の29回の出場回数を誇っています。続くのが、マレーシア、ニュージーランドの28回、インドネシア、シンガポール、姉妹都市ポートランド市が25回の出場となっています。フィンランドが23回、タイが17回出場と続いています。

スウェーデンチームの過去の成績を振り返ると、A、B2グループ制時代は、Bグループで優勝1回、準優勝2回、審査員特別賞を4回受賞し、2004年(第31回大会)から現行の1グループに移行してからは、2004年優勝(作品名:鉤爪)、準優勝はタイ。2012年準優勝(作品名:スウェーデンのおみやげ)、優勝は香港。

今年2013年は4位。優勝はタイ(1グループ移行後で優勝4回、準優勝2回を誇る)、準優勝はフィンランド(同じく準優勝2回)、3位インドネシア(上位入賞経験無し)との結果となり、各国のレベルの高さ・力の入れようがひしひし

と伝わってきました。

2月4日の雪像制作開始日には、杉本会長をはじめとする北海道スウェーデン協会のメンバーが応援に駆けつけました。例年の通り、ワイン、お菓子その他元気の出る食品を差し入れました。また、当日は当別町のご婦人達が名物「団子汁」を差し入れ、我々もご相伴にあずかることができました。

表彰式後のスウェーデンチームの晴れやかな、充足感あふれる表情に、全力を出し切った様子が伺えました。来年に期待し、万感の思いを込め「Rycka till」と帰路の平安を祈ってお別れいたしました。

〈事務局長〉



事務局だより

平成24年度から事務局長を引き継ぎました横山隆です。昨年度までは、墨谷前事務局長の緻密な采配の下で、安穩と協会の諸行事に参加しておりました私ですが、この一年を振り返りますと、北海道スウェーデン協会が如何に先人のご苦勞で支えられてきたか、身をもって感じております。また、川崎先生のパワーと人脈での企画に支えられ、きらりと光る「情報を発信」する会として、重要な役割を果たしてきたかと痛感する次第です。フィンランドの建築家「イエロ・サーリネン」等グループの建築活動を評して「北からの光」という言葉があります。川崎先生が、本拠地をスウェーデンに移された後も、本会は「北からの光」であり続けることが出来るよう会員の皆さまと一丸となって活動を進める決意を新たにしています。ご指導、ご協力の程よろしくお願いいたします。会員の皆さまへの自己紹介を兼ね、日経新聞を気取り、「私の履歴書」を纏めてみました。長い「事務局だより」になってしまうことをお許しください。

私の履歴書

生い立ちと父親のこと

昭和26年12月27日、横山政之助・綾の三男三女の末っ子として、札幌市中央区南9条西8丁目東屯田通沿いで生を受けました。長男が肺炎により夭逝したため、戸籍上は次男となっています。当時、出回り始めたばかりで高価だった抗生物質ペニシリンを購うお金の窮し、「幼い命がもう何日か生き延びていたら、借金で自分が首を括らなければならなかった。」と、父は生前によく話していました。

父は木製建具製造業を営んでおり、最盛期には10名ほどの職人を抱えて工場（こうば）を切り盛りしていました。職人さん達の中の、職業訓練校を出たての若い人達から、世帯を持つ前の中堅の人達まで、常時5～6人が住み込みで働いており、私が小学校に上がる前の我が家の食卓風景は、朝は家族7人+母方の祖母+住み込みの職人さんで大きな木製の食卓を囲み、昼は登校した兄姉に代わり世帯を持った職人さん達が加わり、夕食は朝と同じ顔ぶれが再び並ぶと言う賑やかなものでした。

父は明治43年10月生まれ、富山県出身で幼い頃に父親と死に別れ、再婚した母親に連れて行ってもらえずに横山家の養子になった経緯があります。尋常高等小学校を卒業後、同じ村出身の、東京都荒川区で建具製造業を営んでいた堀田与吉を頼って弟子入りしました。働きが認められてのことと思いますが、後に堀田与吉の長女綾と結婚し、堀田与吉の工場を引き継ぎました。生前、父はよく、「工場には多額の借金も付いてきた」と笑いながら話しており、母も苦笑しながら黙って聞いていました。

東京での空襲が激しくなったのを機に、縁あって札幌へ疎開し、その後、札幌で建具製造業を続けてきました。昭和39年には、工場の経営を義理の弟（私にとっては、母親の弟：母方の叔父）に譲りました。譲った後も70歳過ぎまで職人として働き続けると共に、札幌市白石区南郷通三丁目に転居し、その地で銭湯「札南湯」を開業いたしました。後年、銭湯経営を始めた理由を尋ねますと、「箱根の山の山賊でさえ、他人の服を脱がせて金を取る。銭湯は、他人が自ら服を脱いで金を置いていく。こんな楽な商売は無かったから！」と、茶目っ気たっぷりの表情で語ってくれました。いわば働き通しの人生、借金を常に背負っていた人生だった様な気がします。

私の考え方、生活信条には、父の生活体験に由来する教えが色濃く影を落としています。家族の愛情が薄かった幼少期の体験から、父は特に「兄弟仲良く」、職人さん達を含めた大家族のように「人が集まり易い場造り」、そして、「皆、朗らかに平等に」と子供達に教え続けていたような気がいたします。これらが、今の私の思考・行動のバックボーンかなと思っています。

清水建設勤務の34年間の中で、私が学んだ特筆すべきこと

海外経験：清水建設入社後2年目のネパール王国勤務、10年目のスウェーデン留学では、異文化理解の土台となる柔軟な思考と積極性、コミュニケーションの基礎となる「良く聞く」姿勢の大切さを学ぶことができました。

ネパールで始めて海外援助工事を受注(今で言うODAプロジェクト)した清水建設海外建設部では、施工のために送り出す建築技術者の選考に当たって、「ネパールはヒマラヤ山脈の国。寒さと粗衣粗食に耐えることのできそうな人間は北海道人」と考えたそうです。

出身地・出身大学も北海道、入社2年目の若手が北海道支店で一つ目の現場を終えるタイミングと言うことで、私に白羽の矢が立ちました。同じ方面から通っていた人事部長と海外建設部次長が、通勤電車の中での会話で決めた人事とのことでした。当時の私は新婚5ヶ月目。当初、6ヶ月間の工期と言うことで、単身赴任の予定で成田空港を出発しました。後日、妻に聴くと、私を見送りに来た成田空港で、私の上司の建設所長にそっと呼ばれ、「ネパールはユックリズムの国。旦那さんは工事期間が延び、半年では帰国できないだろう。何があっても自分達で責任を持ち、会社に迷惑を掛けなければネパールと一緒に住んで良い。身一つで良いから、後から来なさい。」と言われたそうです。結局三ヶ月後、妻はスーツケース1個を抱え、ネパールにやって来ました。

その後、妻は長女を身ごもり、安定期である妊娠6ヶ月目まで、約10ヶ月の間ネパールに滞在しました。私の滞在は更に伸び、結果的には1年半に及びました。日本語の「ゆっくり」は、ネパール語では「ビスターリ」。ネパール人は、仕事の上では、何かにつけてビスターリ、ビスターリと言いますが、我々日本人(妻と私)は、いつも「チト、チト」(急いで、急いで)と言い続けたような気がします。

スウェーデン留学は、清水建設社内の公募留学制度に応募して実現しました。当時、北海道電力泊原子力発電所の建設工事に従事しており、北海道の将来の大型建設工事のためには、冬期間の建設工事がキーポイントと痛感していました。第三回目の社内公募留学制度に、「寒冷地での建設工法の合理化」研究というテーマで応募書類を書き、10人の応募者の中、派遣4人枠の4番目で何とか通過することができました。

その後、妻と3人の子供(長女7歳、長男4歳、次女1歳)を帯同し、スウェーデン王国イェテボリ市で2年半の学生生活を送ることとなりましたが、自分の勉強に忙しく、十分に家族の面倒を見ることもできませんでした。子供が病気で熱を出したときには病院で長時間待たされ、妻に「子供に風邪を引かすな!」と愚痴ったものでした。妻からは、「お父さんは自分の勉強のことだけで頭が一杯で、自分の研究だけ完遂すれば良いと思っているかも知れないが、後々、子供達がスウェーデンに来て良かったと言う思い出を残してあげないと成功とは言えないと思う!」と釘を刺されてしまいました。これで、一段とハードルが高くなってしまいましたが、日常生活は依然として妻頼み。退屈している子供達を市電に乗せ、街のあちらこちらの探検に連れて行ったのも妻でした。

結果として、私は北欧独特の学位である準博士号(博士号と修士号の中間の2年間の課程)を取得することができ、日本の小学校2年の夏休みに渡瑞してスウェーデンの小学1年生、2年生を経験した長女は、フェースブック上で、いまだにスウェーデンの小学校同級生のグループと情報の交換をしていますので、ほっと胸をなで下ろしています。

子会社出向経験：留学から帰国後、子会社の清水不動産が経営参画する「北欧風水族館登別マリンパーク」に営業部長として出向しました。建設業と異なった業態に於いて、経営と労務管理の基本とともに、客商売の難しさ、客商売の常としてのクレーム対応についての厳しさを、身を以て学びまし

た。

副支店長経験：清水建設勤務最後の6年間、副支店長として3人の支店長を支えました。プロジェクト、お客様からのクレーム、支店の経営等に関して次々に起こる諸々の課題に、私自身の答えは持ちつつ、支店長自身に最適の判断を下してもらおうべく、問題の分析・取り得る対策・想定される効果・関連情報等をバランス良く整理して上申することを心がけました。バランス重視は時として焦点がぼやけるリスクも孕みますが、最初に大まかな解決策の方向感と緊急度合いの時間軸を自分で確認し、回避できたと自負しています。常日頃から支店長とコミュニケーションを取り、方向感覚と時間感覚を摺り合わせする必要がある事は言うまでもありません。

おわりに

現在の職場である「国立大学法人 北海道大学サステイナブルキャンパス推進本部」に勤務して1年半が経過しました。北海道大学を持続可能な社会のモデルにと言う大きな目的のために設置された部署ですが、今の職場に必要なこと全ては、家族と清水建設時代の先輩、同僚や後輩達に教えられたと感謝しております。また、今現在も、素晴らしい先生方、素適な仲間達、元気な学生さん達に囲まれながら、「知的好奇心を刺激するディズニーランド：大人の遊園地」に通わせて頂いていること、大いに感謝しなければいけないと思っています。

〈事務局長 横山 隆〉

追記：本号の「白夜」の編集は、全面的に横山事務局長と赤坂さんのお世話になりました。また理事の南幸衛さんが、素敵なスケッチを提供して下さいましたので、「白夜」の表紙の丁裁を一寸変えてみました。カラーが使えないのが残念です。

発行人

北海道スウェーデン協会

会長 杉本 拓

〒062-0911

札幌市豊平区旭町3丁目1-7 北海道東リビル3階
(株)アラゼン内

TEL(011)837-8411

印刷／(株)アイワード

札幌市中央区北3条東5丁目

TEL.241-9341 FAX.207-6178
